Chongsheng Fangyan
Hanzi Ziliao De Yanjiu

# 冲绳方言汉字资料的研究

赵志刚／著

黑龙江人民出版社

# 冲绳方言汉字资料的研究

赵恩俊 著

常州大学图书馆
藏书章

黑龙江人民出版社

**图书在版编目（CIP）数据**

冲绳方言汉字资料的研究 / 赵志刚著.—哈尔滨：黑龙江人民出版社，2010.7

ISBN 978－7－207－08713-3

Ⅰ.①冲… Ⅱ.①赵… Ⅲ.①日语—方言研究 Ⅳ.①H367

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2010）第 124586 号

**责任编辑**：常　松

**装帧设计**：刘永宁

# 冲绳方言汉字资料的研究

赵志刚　著

**出版发行**　黑龙江人民出版社

**通讯地址**　哈尔滨市南岗区宣庆小区 1 号楼（150008）

**网　　址**　www.longpress.com

**电子邮箱**　hljrmcbs@yeah.net

**印　　刷**　哈尔滨天兴速达印务有限责任公司

**开　　本**　880×1230　1 / 32

**印　　张**　6.875

**字　　数**　200 千

**版　　次**　2010 年 6 月第 1 版　2010 年 6 月第 1 次印刷

**书　　号**　ISBN 978－7－207–08713– 3/H•336

**定　　价**　16.00 元

（如发现本书有印制质量问题，印刷厂负责调换）

**本社常年法律顾问：北京市大成律师事务所哈尔滨分所律师赵学利、赵景波**

本书为黑龙江省教育厅2007年度人文社会科学项目（项目编号：11524058）

# Chongsheng Fangyan
## Hanzi Ziliao De Yanjiu

# 自　序

沖縄方言に関する漢字資料に出会ったのは、大学院修士課程に進学した時のことである。指導教官の研究室で、たまたま手にした史料が『琉球譯』であった。その後、先生の指導の基で、今日に至るまで漢字資料群について調べてきた。

漢字資料とは、主として中国の明代から清代にかけて琉球王を冊封するために派遣された冊封使が、当時の沖縄方言の発音を漢字で記録した中琉対訳資料である。これらの資料は、また歴史、政治、宗教、民俗、地理、文学などを研究する重要な基礎資料でもある。

漢字資料の研究は、沖縄方言の通時的研究ばかりではなく、日本語史の研究にも重要な意味を持っている。沖縄方言は、言語学的に系統が同じであると証明されている日本語と祖語を同じとしている。従って、沖縄方言の研究によって明らかになった言語事実は、古代日本語の研究、更に遡って共通の祖語の実態を明らかにする重要な手がかりにもなる。

沖縄方言は漢語の影響が少なく、地理的隔離などの条件から古代日本語の名残はあるが、独自に発展してきた言語でもある。沖縄方言には、京畿の言葉において文献時代以前に存したと推定されるｐ音が残存し、上代特殊仮名遣甲乙二種の音も絡んで



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

いる。従って、日本語音韻史の立場から、沖縄方言の三母音化傾向とｐ音を考える必要がある。つまり、沖縄方言の三母音化傾向と本土方言の五母音、沖縄方言のハ行音がｐであるのと本土方言のハ行がｐでないの(p>Φ>h)を統合的に説明する必要があると思われる。

この度の本書は、沖縄方言漢字資料研究の基礎作業として書き貯めた拙論を中心に纏めたものである。中世漢語の音韻を反映している『中原音韻』と近代漢語の音韻を反映している『華英辞典』を活用して、漢字資料の音訳字を整理・分析し、各時代における沖縄方言の実態を実証的に明らかにすることを主題とした。また、漢字資料を中心に論を展開するが、同時期に成立したハングル資料とアルファベット資料なども活用し、先行研究を検証しながら、沖縄方言の変化過程についても考えることとした。

本書の各章節の概要は、次の通りである。

第一章では、日本語と沖縄方言の関係(音韻の対応関係、文法の対応関係、沖縄方言の独特の語彙)、沖縄方言の下位区分と沖縄方言の歴史について述べた。

第二章では、漢字資料の位置と研究目的、李鼎元の『使琉球記』と『琉球譯』、沖縄方言と中国語の音韻体系の比較について論じた。沖縄方言に関する資料として、仮名資料、ハングル資料、漢字資料の成立、資料間の関係のような書誌学的な研究が主な内容である。

第三章では、『中山伝信録』におけるエ段音の表記と音価について考察し、18 世紀或いは更に前の時代の沖縄方言のエ段音の実態を明らかにした。沖縄方言の三母音(a・i・u)は、沖縄方言と本土方言とを大別する重要な特徴の一つである。

第四章では、『琉球譯』の子音について検討した。特に、子音

の口蓋化・破擦音化は看過できない重要な問題である。その結果、19 世紀初頭の沖縄方言の子音の口蓋化・破擦音化の実態を明らかにした。

第五章では、『琉球譯』の動詞の活用について考察した。『琉球譯』から、四段、上一段、上二段、下二段、ラ変、カ変、ナ変、サ変の 8 種類の動詞が見出された。動詞の活用は、基本的に古代日本語と一致していることが分かった。

最後に付録として、漢字資料の陳侃著『使琉球録』「夷語附」と『中山伝信録』「琉球語」を参考に付することにした。

沖縄方言漢字資料の研究には、日本語学、中国語学、方言学、歴史学、社会学などに関する知識を必要とする。専攻以外の分野が多く、甚だ心許なく思うものである。浅学非才の身、狭い視野から粗雑な論を展開し、世の物笑い種となるであろうが、沖縄方言に関する漢字資料研究進展の捨石の一つにともなれば幸いと存じる。

今後の課題としては、15 世紀から 19 世紀の間に書かれた諸漢字資料を更に厳密に分析することにより、5 母音から 3 母音への変化(狭母音化)、及びそれと連動して起こった子音の変化（口蓋化、破擦音化）過程を明らかにしたい。また、諸漢字資料の成立と継承関係についても調べたいと思う。

さらに、研究範囲を広げ、本土方言に関する漢字資料について研究を深めたいと思う。「日本寄語」「日本館訳語」の中の音訳字の使用の仕方について疑問視されているものを、改めて考察する必要がある。ライフワークでもあるし、将来の抱負でもある。

誠に粗雑拙劣なものながら、このように本書を出版できたのは、言うまでもなく長年にわたる恩師諸先学をはじめとする諸方の多大の御学恩御厚誼の賜物である。就中、日本語学研究への道を開いて頂いた沖縄国際大学の高橋俊三先生、広島大学の多和田眞一郎先生に対し、厚く衷心より謝意を表す次第である。

本書の出版に当たって、黒竜江大学東語学院の陳百海先生にご協力とご教示を賜った。深謝申し上げる。

また、黒竜江人民出版社の常松氏には、推敲不足の原稿の組版に、ひとかたならぬご苦労をおかけした。しるして感謝申し上げる。

2010年4月16日

黒竜江大学にて

趙　志剛

# 凡　例

1. 本書で言語資料として使用した『中山伝信録』「琉球語」と『琉球譯』の原本は、『國家圖書館藏琉球資料匯編』（北京圖書館出版社）に依拠した。
2. 本書の第一章と第二章では、「沖縄方言」という用語を使用したが、琉球列島で行われている諸方言を指す。地理的に見ると、北限は奄美大島北端の佐仁部落で、西南限は八重山諸島の与那国島である。
3. 本書の第三章からは、「沖縄語」という用語を使ったが、漢字資料（史料）から帰納される言語を指す。結果として、首里方言を中心とする沖縄島中・南部地域の言葉を示すことになる。
4. 見出し語の直後の【　】で囲んだ部分は、見出し語に相当する日本語である。音訳字が反映している音とできる限り近い音を再現するため、歴史的仮名遣いと現代仮名遣いを合わせて示した。
5. 音訳字の後の（　）内の数字は、用例数を示す。
6. コンピューターに出てこない漢字は合成した。（　）は、文字と文字を横方向に合成して一文字にすることを示す。

（　＋　）は、文字と文字を縦方向に合成して一文字にすることを示す。

〔例〕（皆風）曰宜瓦喀喀即

（稍＋女）曰阿你

7. 難字、誤字、脱字、衍字だと考えられる部分に、注解を付けた。
8. 『学研　漢和大辞典』のローマ字表記と『華英辞典』のウェード式表記は、原本に従うことにする。論述上必要なものは、国際音声記号に直して表示した。
9. 音訳字の解釈の必要に応じて、現代首里方言も附して置くことにした。現代首里方言は『沖縄語辞典』(国立国語研究所　平成 13 年 3 月 30 日　9 刷発行）に依拠する。
10. ？は意義未詳語であることを示す。音韻考察の範囲に入れないことにした。

# 目　次

第一章　日本語と沖縄方言 ..... 1

第一節　日本語と沖縄方言の関係 ..... 1
一、音韻の対応関係 ..... 2
二、文法の対応関係 ..... 15
三、沖縄方言の独特の語彙 ..... 21

第二節　沖縄方言の下位区分 ..... 24
一、日本の方言区画 ..... 24
二、沖縄方言の下位方言 ..... 27

第三節　沖縄方言の昨今 ..... 30

第二章　沖縄方言の言語資料 ..... 45

第一節　漢字資料の位置と研究目的 ..... 45
一、仮名資料 ..... 45
二、ハングル資料 ..... 53
三、漢字資料 ..... 54
四、アルファベット資料 ..... 60



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

第二節　李鼎元の『使琉球記』と『琉球譯』 ..... 76
一、李鼎元の『琉球譯』 ..... 76
二、李鼎元の『使琉球記』 ..... 80

第三節　沖縄方言と中国語の音韻体系の比較 ..... 85
一、母音の比較 ..... 86
二、子音の比較 ..... 87

第三章　母音の表記と音価 ..... 88

第一節　はじめに ..... 88

第二節　先学の研究 ..... 89

第三節　研究方法 ..... 92

第四節　エ段音の表記と音価 ..... 93
一、「エ」の表記と音価 ..... 93
二、「ケ」の母音の表記と音価 ..... 94
三、「ゲ」の母音の表記と音価 ..... 97
四、「セ」の母音の表記と音価 ..... 98
五、「ゼ」の母音の表記と音価 ..... 99
六、「テ」の母音の表記と音価 ..... 100
七、「デ」の母音の表記と音価 ..... 101
八、「ネ」の母音の表記と音価 ..... 102
九、「ヘ」の母音の表記と音価 ..... 103
十、「ベ」の母音の表記と音価 ..... 103
十一、「メ」の母音の表記と音価 ..... 104
十二、「レ」の母音の表記と音価 ..... 105
十三、「ヱ」の表記と音価 ..... 106

第五節　結　論 ..... 107

第四章　子音の口蓋化・破擦音化 ..... 109

第一節　はじめに ..... 109

第二節　子音の口蓋化・破擦音化 ..... 111
一、「カ」の口蓋化・破擦音化 ..... 111
二、「ガ」の口蓋化・破擦音化 ..... 114
三、「キ」の口蓋化・破擦音化 ..... 115
四、「ギ」の口蓋化・破擦音化 ..... 117
五、「ケ」の口蓋化・破擦音化 ..... 117
六、「ゲ」の口蓋化・破擦音化 ..... 119
七、「タ」の口蓋化・破擦音化 ..... 120
八、「チ」の口蓋化・破擦音化 ..... 122
九、「ヂ」の口蓋化・破擦音化 ..... 123
十、「ツ」の口蓋化・破擦音化 ..... 123
十一、「ヅ」の口蓋化・破擦音化 ..... 124
十二、「テ」の口蓋化・破擦音化 ..... 124
十三、「デ」の口蓋化・破擦音化 ..... 125
十四、「ト」の口蓋化・破擦音化 ..... 126
十五、「ド」の口蓋化・破擦音化 ..... 128

第三節　結　論 ..... 129

第五章　形態論について ..... 130

第一節　はじめに ..... 130

第二節　終止形 ..... 131
一、四段活用動詞 ..... 131
二、上一段活用動詞 ..... 135

三、上二段活用動詞 ..... 136
四、下二段活用動詞 ..... 136
五、サ行変格活用動詞 ..... 138
六、ナ行変格活用動詞 ..... 139
七、ラ行変格活用動詞 ..... 139

第三節　連用形 ..... 141

第四節　未然形 ..... 145

第五節　連体形 ..... 146

第六節　結　論 ..... 147

主要参考文献 ..... 149

資　料　編 ..... 155

陳侃著『使琉球録』「夷語附」 ..... 155

『中山伝信録』「琉球語」 ..... 177

# 第一章　日本語と沖縄方言

## 第一節　日本語と沖縄方言の関係

一つの国語の内部において、音韻・文法又は語彙などの点で相違があり、しかも、それらの相違によって、幾つかの言語集団に分れるとき、夫々の分団を広義の「方言」という（築島裕『国語学』東京大学出版会による）。

日本語には多くの方言が存する。それらの方言には、独自の特殊な要素が存在するばかりではなく、相互間に部分的に共通性も持っているのが普通である。このような共通性に基づいて、日本の方言を幾つかの群に区分することができる。

日本方言学の基礎を築いた東條操の方言区画論に基づき、日本の方言を分類すると、まず日本語は、本土方言と沖縄方言に二分される。

沖縄方言とは、奄美、沖縄、宮古、八重山の四群島に分布する諸方言の総称である。地理分布は、琉球と薩摩の間で行われた慶長戦争以前に琉球王朝が支配していた地域と一致する。奄美群島は、慶長戦争後、薩摩が支配したが、奄美群島の諸方言はやはり沖縄方言に属する。

沖縄方言と本土方言との間に発音、文法、語彙の面で規則的な対応関係をもち、共通の祖先から分岐した姉妹語であることは、B. H. chamberlain(1850～1935)、E. Polivanov(1884？～1937)、伊波普猷(1876～1947)などの先学によって証明されている。

とはいえ、両方言の差異はきわめて大きく、沖縄方言に属するどの方言も本土方言のどの方言ともまったく通じないほどである。一般言語学の観点から見れば、本土方言と沖縄方言の違いというのは、方言というより、違う言葉と捉えた方が自然で、沖縄方言は日本祖語から千数百年前に枝分かれしたそうである。日本語の方言学者は、一般に沖縄方言を日本語の方言と捉えているが、この沖縄方言と本土方言との差異は、イタリア語とフランス語くらいの違い、英語とドイツ語以上の違いほどに著しい。本土から政治的に独立した琉球王国としてこの地域が認識されてきたという、歴史上の理由が働いて、日本語と独立した言語と考える人もいる。

日本の方言は、8世紀頃に中央語を含む西日本と東国と言われる東日本に分かれていたが、13世紀までに西日本の方言が新しく変化した上方の方言と、依然として古態をとどめる九州方言との間に差が生じ、東西の二大対立から、東部、西部、九州の三大方言になってきたと考えられている。沖縄方言は、本土の諸方言のうちでは、音韻、文法、語彙の各面からみて、九州方言にもっとも多くの類似点を見出され、古い時代の九州方言から分岐したものであることは確実とみてよいとしている。

以下、音韻・文法・語彙の面から、沖縄方言と本土方言との対応関係について述べる。

## 一、音韻の対応関係

沖縄方言と本土方言のもっとも大きな違いは、母音、特に短

母音の違いである。沖縄方言の短母音は、ほとんどが /a/・/i/・/u/の3つで、本土方言の短い/e/に対応する母音が/i/（沖縄方言の大部分）、または/ï/（奄美大島本島、徳之島など）で、本島方言の短い/o/に対応する母音が/u/である。沖縄方言/e/・/o/の短母音や、それらを含む複母音は通常、伸ばす音すなわち[e:][o:]の形で現れる（表1参照）。

表1　　共通語と沖縄方言の音素対応表

| 共通語 | 沖縄方言 |
|---|---|
| /e/ | /i/ |
| /o/ | /u/ |
| /ai/、/ae/ | /e:/ |
| /au/、/ao/ | /o:/ |

現代（共通）日本語と沖縄方言との音声・音韻の対応の例を示すと、次のようである。

**/a/→[a]/a/の対応**

/ka/→[ka]/ka/　　[kasa]（傘）/kasa/
　　[saka]（坂）/saka/
/ga/→[ga]/ga/　　[gaʃi]（餓鬼）/gaci/
　　[tuga]（咎）/tuga/
/sa/→[sa]/sa/　　[sa:ru:]（猿）/sa'aru'u/
　　[ʔasa]（朝）/ʔasa/
/za/→[ʤa]/za/　　[ʤaʃiʃi]（座敷）/zasici/
　　[kaʤaji]（飾り）/kaza'i/
/ta/→[ta]/ta/　　[tabi]（旅）/tabi/
　　[Φuta]（蓋）/huta/
/da/→[da]/da/　　[da:gu]（団子）/da'agu/
　　[juda]（枝）/'juda/
/na/→[na]/na/　　[na:]（名）/na'a/



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com